

2017 年度点検・評価シート

※下記の指摘事項、課題を踏まえて、Ⅱ点検・評価 Ⅲ【達成目標】欄を記述してください。

（進捗状況を【現状説明】に記述し、必要に応じて新たに【目標】を設定する。）

2016 年度大学評価（認証評価）結果指摘事項 特に指摘事項なし
2016 年度外部評価委員会指摘事項 特に指摘事項なし
前年度からの課題（2016 年度点検・評価シート IV 次年度への課題 より転記） 特になし

Ⅰ 評価項目・担当部局

対象部局	スポーツ・健康科学研究科
評価基準 1	理念・目的
点検・評価項目(1)	1-1 大学・学部・研究科等の理念・目的は、適切に設定されているか。
評価の視点	理念・目的の明確化
	設置の主旨や歴史からみた理念・目的の適切性
	個性化・独自性、国際化への対応
点検・評価項目(2)	1-2 大学・学部・研究科等の理念・目的が、大学構成員（教職員および学生）に周知され、社会に公表されているか。
評価の視点	構成員に対する周知方法と有効性
	社会への公表方法
点検・評価項目(3)	1-3 大学・学部・研究科等の理念・目的の適切性について定期的に検証を行っているか。
評価の視点	責任主体・組織、権限、手続きを明確にしているか。また、その検証プロセスを適切に機能させているか。

Ⅱ 点検・評価 対象期間は 2016 年 4 月～2017 年 5 月までとする。（教員数、学生数などのデータの基準日は 2017 年 5 月 1 日）

【点検・評価項目ごとの現状説明】

1-1	スポーツ・健康科学研究科は、「スポーツや身体活動及び健康や医療に関する諸問題を分野横断的及び学際的な視座から解決するために、人間という視点から適応、行動、健康、医療に関する研究を行い、幅広い視野と高度な技術・技能をもった教員、専門的指導者及び職業人を社会に輩出することによって人々の健康的な生活や文化的活動に貢献する」ことを理念として 2009（平成 21）年に設立された。 このような理念に基づいて、研究科の教育研究上の目的を、以下のように大学院学則に定めている(A1-2 第 3 条の 2 第 1 項第 7 号)。 スポーツ・健康科学研究科修士課程は、スポーツ科学分野と健康科学分野を配置し、スポーツや身体活動および健康や医療に関する分野横断的、学際的な教育研究を行うことで、幅広い視野と高度な知識・技能をもった専修免許を有する教員、各領域の専門的指導者および職業人を輩出することを目的とする。 前年度までの取り組みとしては、その適切性及び周知する方法についてカリキュラム改革 WG で検討し、研究科の理念と目的が研究科の 3 つのポリシーに照らし合せて適切であること、また大学院生に対する定期的(年 1 回)なアンケート調査の結果、概ね周知されていることを研究科委員会に報告し、その有効性について検証してきた。 従前より、スポーツ科学分野においては、各領域に所属する大学院生の科学論文の独自輪読会、健康科学分野における学会発表及び論文投稿の啓発などにより国内外の学会発表及び論文採択件数が増加、学会賞を受賞するなどの成果を上げている。しかし、入学者数は減少傾向にあるので、新たな取組として、平成 29 年度 4 月から新カリキュラムを導入し、教員組織を 4 領域（スポーツ科学領域・応用スポーツ科学領域、健康科学領域・健康情報科学領域）から 2 分野（スポーツ科学分野、健康科学分野）への移行などを実施した。 理念・目的については、平成 29 年(2017 年)度 5 月現在、3 つのポリシーに照らし合せて適切であると考えているが、スポーツ科学科の定員増、健康科学科の看護学科設置による学部生の増加を見据えて、個性化・独自性、国際化に応じて、今後更に自己点検・評価委員会で検討していく。
1-1	以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【 】内に○・×で記入し、○の場合はその内容と結果を記述してください。 理念・目的の設定について。【○】 具体的事例：理念・目的の設定は問題ないと考えているが、設定の適正性については今後も検証していく。
1-2	スポーツ・健康科学研究科の教育研究上の目的は、ホームページ(B1-6)や『大東文化大学大学院案内』(A1-7 p2, p30)、スポーツ・健康科学研究科『大学院履修要項』(A1-16 p.11～p.12)によって教職員や学生に周知を図り、社会に公表している。また、

	入学時のガイダンスや必修科目である「スポーツ・健康科学研究法」(オムニバス方式)の前期の初回授業において、研究科委員長が本研究科の理念および目的などを周知させている(A1-16 p.11～p.12、B1-22 d2-表 1、2016 年度のアナケート調査の追加予定)。 従前より、社会への公表方法については、スポーツ・健康科学研究科ホームページ、大学院公開説明会(学科及び学外対象者説明会)などで公表してきたが、その成果については特に調査は行っていないので、今後、オープンキャンパスや保護者会を通じて積極的に公表し、今後のオープンキャンパスや保護者会、大学院入学試験の口述試験などを通じてその成果を計測していきたい。
1-2	以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【 】内に○・×で記入し、○の場合はその内容と結果を記述してください。 (1) 構成員(教職員、学生)に対する周知方法と、その有効性について【○】 具体的事例：スポーツ・健康科学研究科の理念及び教育研究上の目的について、研究科委員長が前期(オムニバス方式の)必修科目「スポーツ・健康科学研究法」の初回講義において大学院生に周知し、最終回講義において専攻主任が理念及び教育研究上の目的に関する理解度についてアンケート調査を行い、その結果を、前期最終(7月)の研究科委員会で報告する。この報告を通じて、理念及び教育研究上の目的が適切に理解されているか、さらにアンケートが適切かつ有効的なものとなっているかを検証する。 (2) 社会への公表方法について【○】 具体的事例：学部授業やオープンキャンパスや保護者会・大学院公開説明会などの機会を得て、積極的に公表する。
1-3	理念・目的の適切性については、自己点検・評価において定期的な検証を行っている(B1-16)。また、研究科の開設から8年目を迎えるに当たり、今後のスポーツ・健康科学研究科の将来像を踏まえ、2014年度に研究科内に設置したカリキュラム改革ワーキンググループおよび入試ワーキンググループから選任された委員から構成される検討委員会において、理念・目的の適切性などについて検証を進める予定である。
1-3	以下の評価の視点について、新たな取組の有無、または、継続している取組の成果の有無を【 】内に○・×で記入し、○の場合はその内容と結果を記述してください。 理念・目的の検証に関する責任主体・組織、権限、手続きについて【×】 具体的事例：

【効果が上がっている事項】

1-1	
1-2	
1-3	

【改善すべき事項】

1-1	理念及び目的の適切性など、研究科の根幹に関わる事項の検討作業に着手する。
1-2	
1-3	明文化された研究科の3つのポリシーに基づいて、教員と院生を対象とした定期的なアンケート調査を通して、研究科の理念・目的の適切性について研究科委員長、専攻主任、自己点検評価委員、カリキュラム改革ワーキンググループおよび入試ワーキンググループから選任された委員から構成される検討委員会において定期的に検証する。

Ⅲ 【達成目標】 目標の進捗状況は、「S：完全に達成」「A：概ね達成」「B：やや不十分」「C：不十分」で、評価する。

達成目標		目標達成の指標となるもの	評価					
			2014	2015	2016	2017	2018	
中期目標 (2014～2018)	1-2,1-3 理念及び目的の適切性など、研究科の根幹に関わる事項の検討作業に着手するとともに、理念・目的が教職員や学生にどの程度浸透しているかについて定期的に検証するシステムを構築する。	「スポーツ・健康科学研究科自己点検・評価委員会報告書」、あるいは「研究科委員会議事録」に検討結果が記載される。	→			A	A	
16 年度 目標	1-3 研究科の理念と目的が研究科の3つのポリシーに照らし合せて適切であるかカリキュラム改革WGで検討する。	研究科委員会議事録に検討結果が記載される。				B		

	1-2 年度始めに大学院生に対して研究科の理念・目的に関する定期的なアンケート調査を実施する。	スポーツ・健康科学研究科 FD 委員会報告書及び研究科委員会議事録に検討結果が記載される。				A		
17 年度 目標	対象期間は 2017 年 4 月～2018 年 3 月) 1-1 研究科の理念と目的が研究科の 3 つのポリシーに照らし合せて適切性について自己点検・評価委員会が検討する。	研究科委員会議事録に検討結果が記載される。					A	
	1-2 年度始めに大学院生に対して研究科の理念・目的に関する定期的(年 1 回)なアンケート調査を実施して研究科委員会に報告し、その有効性について検証する。また、オープンキャンパスや保護者会を通じて積極的に社会に公表し、次年度のオープンキャンパスや保護者会、大学院入学試験の口述試験などを通じて社会への公表の成果を計測する。	研究科委員会議事録に検討結果が記載される。					A	

IV 評価専門委員会所見

1-2【現状】入学時のガイダンスや必修科目である「スポーツ・健康科学研究法」の前期の初回授業において、研究科委員長が本研究科の理念および目的などを周知させていること、最終回講義において専攻主任が理念及び教育研究上の目的に関する理解度についてアンケート調査を行い、その結果を、前期最終の研究科委員会で報告していることは、高く評価できます。他研究科にとって、モデルになり得ることです。

1-1,1-2,1-3【目標】目標と指標の設定が具体的であり、評価できます。

V 所見への対応

今後も継続して取り組んでいきます。

VI 次年度への課題

本項目の根拠資料（データ類、裏付けとなる資料）

<根拠資料>

A1-2 大東文化大学大学院学則

A1-7 2017 年度大東文化大学大学院案内

A1-16 2017 年度大学院履修要項スポーツ・健康科学研究科

A1-17 2017（平成 29）年度大学院の手引き

B1-16 大東文化大学ホームページ（自己点検・評価活動）

<http://www.daito.ac.jp/information/examine/inspection/index.html>

B1-22 大学データ集

<大学基礎データ>

d1-表 1 全学の設置学部・学科・大学院研究科等（2017 年 4 月 1 日現在）

〔追加資料〕